

この繪は無論私共の少年時代を畫いたものであります。

第二の繪は少年は既に若者になつて、熱心にある目標を見つめてゐます。善の精はまだ舵を執り帆を繰てゐます。けれども、この時すでに惡の精は眼をさまして、善の精から舵を奪ひ取らうと心がまへをしてゐます。彼はこの試みに成功するでありませうか。

第三の繪はこの質問に解答を與へて居ります。青年は今や中年の大人となりました。かれは全力を擧げて襲ひ來たる嵐と戦つて居ります。

空模様は險惡になつて來ました。善の精は泣きながら、シヨンポリと坐つてゐます。それに引きかへ今では惡の精が甲斐甲斐しく舵を執つて嵐の中を進んでゐます。

第四の繪は疲れ切つた老人が、銀髪の頭をして坐つてゐます。嵐は全くその力を費ひ切らして、夕陽は靜に雲の上を照らし、あたりの港一面にその餘影を

投じてゐます。

けれど舟は無残にも櫓は全く折れ、善の精は疲れきり、僅に残つた舵をどうにか動かして居ります。この時惡の精は全く姿を消して見わなくなつてゐます。

この繪は私共が誰しも戦はなければならぬ善と惡との戦を畫いたものであります。少年少女時代にはまだ善の力が強くありますが、だん／＼おほきくなるに従つて、次第に惡の誘惑が強くなつて參ります。

惡に一度敗けたなら、もう取り返しはなかく／＼つきません。戦争のやうに一度味方の軍勢が敗れ、逃げ足がつかますと、再び勢を盛り返すには非常な力がいられます。けれど最初から連戦連勝の勢で進みますなら、たやすく敵に勝つことができます。私共ははじめから惡にまけないやうに心がけなければなりません。

ほんの一寸した油断から取り返へしの出来ないことがあります。私共が誘惑にまけまいとするには、常に用心深くなければなりません。

蜜蜂は花から花へ蜜を取つて歩きますが、その間にその翼に花粉をつけ、甲の花の花粉を乙の花に持つて参ります。けれど、そのために、よい花の色が悪い花の色に害されることがあります。

ある年非常に美しい花が咲き、人々は非常に賞讃しました。そしてその翌年も定めし美しい花が咲くことであらうと、人々は待つて居りました。所がやがて蕾がふくらみ、花が咲いたのを見ますと、それは人々の期待に外れました。美しい花瓣にきたない班點がついてゐるではありませんか。

これのある植物學者が見て、この班點は蕾の時蜂のために他の花の花粉を持

つて來られたためだと申しました。それで賢い花はこんなことのないやうに、昆虫を蕾の中に入れていやうに防いで居りますそうです。

私たちもよく自分の心を守つて、不純な分子を心に入れないやうに注意しませう。

そして人生と云ふ航海に善の精だけに舵を執らせやうではありませんか。

○ イースターの贈物

(イースターのため)

パトリシアとカティは日曜學校から何か昂奮して樂しげに語りながら家路へ歩み運びました。日曜學校の先生のムリンスさんがイースターに一番善い贈物をした者に賞を與へると云ふ約束をしました。それでその組の少女は我こそその賞を得やうと胸に何か考へて校門を出ました。

ムリンスさんは何か特別異なつた贈物をしなければならぬと申されました。それは贈物を與へた人と、貰つた人の兩方に一番喜びを與へた者がよいと云ふ事でありました。そして「私たちが、淋みしい人に贈物をしたなら、それが神様にしたことになると云ふことを、おぼわていらつしやい」と先生は申されました。

パトリシアは、自分が知つてゐる人でたれが一番淋みしい人だらうかと考へて見ました。緑色の窓のついた、高い垣根で取りかこまれた白い家が彼女の頭に浮びました。「そうだ、私は贈物をあの可愛そうなバツクスターおばさんにあげやう」とさげびました。

「でもあの方は貧乏な方ではないわ、私たちの村で一番のお金持ちよ」とカティが申しました。

「ですけれどもお金が淋みしい人を幸福にはしませんわ、あのおばさんは一人で住まつてゐますし、おばさんに何かして上げる人はみんなお金で雇つた人ばかりです。私のはあの方は淋みしいかたで、見かけほど氣難しい人とは思ひません。私はイースターの贈物をあの小母さんにあげることにしました」と言つてパトリシアはブロンド色の髪を振りまきました。

「そう、あなたがうまく行くやうに祈りませう」と言つてカティは「左様なら」

をしました。

パトリシアは父親と近頃この町に引越して来たのでありました。母親がゐるせんで、パトリシアはまだ十五歳になつたばかりですが、小さい自分たちの家の仕末を自分でしました。彼女の家と、立派な緑の窓のある家との間に、節だらけの古い櫻の木のある廣場がありました。彼女の一方のお隣のバンディ夫人はたび／＼隣の緑の窓のある家とはお交際しないやうに注意して呉れました。「バックスター夫人つて、小さい氣の變な人ですよ。いつも夜明け頃畑の間をブラついてゐます。何故だか知りません。どうしてお金を山程も積んであんなに淋びしげに暮らしていらつしやるのでせう。あのおばさんて、一體わからぬ人です」とお隣の人は申しました。

パトリシアは何んとも答へませんでした。この白髪のはのよつたとび色の眼をしたおばさんに同情しました。おばさんのまはりには、何かしら悲しいものがつきまどうてゐました。いつでもその顔には悲しみの色がただよつてゐました。そこでパトリシアはこのおばさんにイースターの贈物をしやうと決心したのでした。

パトリシアの家は貧乏でイースターの贈物をするお金もありませんでした。それでパトリシアは、自分のお友達はお母さんから贈物をする品を頂いたり、いい知恵を貸して貰つてゐるのだと思ふと、悲しくなりました。けれど彼女は勇敢でありました。彼女は毎日卵を生む自分の牝鶏と、最近三匹の子猫を生んだ猫を持つてゐました。彼女はいろいろ考へた上句この卵を贈物にすることに決めました。それから猫の子を幾度もしらべて見て、毛の柔い一番可愛らしいのを卵と一緒に贈ることにしました。

パトリシアは毎朝卵をあつめて薄い紙にくるみました。毎朝贈物にする小猫の毛にブラシをかけました。毎朝牝鶏は卵を生みました。朝毎に小猫は可愛ら

しくなつて行きました。毎朝彼女は働く時歌を歌ひました。日は早く過ぎて行きました。彼女にはイースターの朝のことが心配になつて來ました。とうとうその日はやつて参りました。

春の日はうららかに、花は香り、小鳥はこの日の喜びをつげ顔に囀りました。パトリシアは朝早く起きました。彼女は紫色の紙で籠をかざり、その中に紙に包んだ七つの卵を入れました。それから小猫にブラシをかけ、その首に紫色の紙を巻きました。教會の一番はじめの鐘が鳴ると彼女は贈物を持つて出かけました。

大きな廣い邸宅の高い垣根の錠を明けました時彼女は俄におちけがして來ました。それでゆつくりと歩いて行つて、戸を臆病そうにたたきました。バックスターおばさんが扉をあけました。そして眼を見はつて口ごもりながら、パトリシアの言ふ事を聞きました。「私は、イースターのお祝ひにまゐりました。パ

ックスターおばさん。今日はイースター、サンデーですから、おばさんに贈物をしやうと思つて持つて参りました。ここに卵がありますが、たつた七つしかありません。私は十二にしたいと思つたのですけれど」

「お入り、娘さん、サアお入り」とバックスター夫人は申しました。彼女はまだ籠を手渡ししないで、夫人に導かれてあとについて入り、すすめられるままに大きな土耳其椅子に腰を下しました。

「あなたはイースターの贈物を持つて來て下さつたのですか」と夫人はたづねました。それでパトリシアは手の籠を渡し、眼を輝かせて小猫を見て「それから、私はおばさんはお淋みしいでせうから、イースターの小猫がお好きでせうと思つて持つて参りました」と申しました。

夫人は小猫を受取つて、その柔い毛をなでて「可愛い小猫だこと、私は愛しますよ」と言つて大きな涙を兩のほほにポタ／＼と落して、パトリシアに心

から打ちとけて話しました。

それから、イースターの月曜の晩生徒たちはムリンスさんのお家へ賞品を頂きに参りました。一人一人代りあつて自分の贈物の話をいたしました。笑ひ聲や陽氣な拍手がつづきました。最後にムリンス先生は「バトリシアさん、あなたは何を贈りましたか」と尋ねました。

幸福な微笑をたたへて、彼女は自分の贈物のお話をいたしました。その卵と小猫でボックスター夫人が喜びました。夫人は今度から教會の禮拜に出席することを約束しました。彼女は心の扉を開いて、長い間の無頓着と反抗を改めて今一度イエスさまを迎へました。彼女はバトリシアを抱きしめ、その赤い髪に接吻しました。そしてその上に熱い涙の雨を降らせました。——長い長い前夫人はどび色のちぢれ毛の娘を持つてゐたのであります。今は死んでをりませんが。「私はボックスターおばさんを愛します。そしておばさんも私を愛しま

す。私は今まで覺わなかつたイースターの喜びでみたされて居ります」とバトリシアは申しました。

「賞品はバトリシアさんの物です」と一同が聲をそろへて元氣よく申しました。
(トロントウ、カン)

地蜂の門番

(母の日のため)

世の中の母親と云ふものが、どんなに子供のために骨身をくたくたくしてくれるかと云ふことは私共みんながよく知つて居ります。赤ん坊を育てるために毎晩眠むれないことがありませう。疲れ切ることもありませう。病氣の時など心配で心配でならない時もありませう。そうしたいろくの苦しい思ひや、つらい目を見るのを喜ぶやうに思はれる程熱心に子供のために働くお母さん程尊いものはありません。

この母のために毎年一日を「母の日」として守り、母の恩を思ひ、母に孝行する日とされたのは、ほんとうに人情の美しい所であります。母親が子供のために働くのは人間だけではありません。動物や昆虫にもあり

ます。フアールと云ふ昆虫學者は地蜂の母親について、面白いことを調べて書いてをります。

地蜂と云ふのは、蜜蜂の一種でありまして、巢を地面の下に拵らへるから地蜂と言はれます。

地蜂は春になると地面の下に坑をこしらへ、そこに幾つも部屋のある蜂の巢を作ります。そして子供を産んで母親になります。生れた子供たちはみんな雌ばかりであります。その数は多くて十匹、普通五六匹位が成長します。

この娘たちはだん／＼と大きくなつて夏になりますと子供を生みます。けれど今度は前に母親が巢を作りましたやうに、新に作らなくても母親がこしらへましたのに、すこし修繕をすれば大丈夫なのです。六七匹から十匹位の娘たちはみんな仲よく母の家に住みそこに子供を産みます。決して喧嘩なんかいたしません。

この娘たちは子供を育てるに大切な蜂蜜を花から花と探しに出かけます。そして小さな入口から入つて來ます。時によりまして二匹も三匹も一緒に歸つて來ることがありますが、そんな時も決して争はないで、早く來た蜂から順序よく入つて行きます。その他の蜂はそれを待つてゐます。

巢は地面にありますから、いろんな他の蟲に襲はれる憂があります。例へば蟻がゐます。穴の中で蜂蜜のいい匂ひがすると蟻はたまらなくなつて入り込まふとします。次には木葉切りと云ふ蟲がゐます。この蟲は穴を掘ることが不得手なものですから、他のものが作つた穴を占領して自分の家になります。それは地蜂の巢が一番によさそうなのでもぐり込まふとします。

けれど、ごつこい、入れないぞと言つて門番を蜂の巢の入口でつとめてゐる者があります。この蜂は年とつて頭が禿げて、光澤のない擦切れた様な装ひをしてゐます。半ば脱毛したその背の上には、褐色と黒茶をだんだら染めにした

美しい斑模様の帯が殆んど消え掛つてゐます。この労働に疲れてすりきれた、古衣裳を見ただけですぐわかりますが、この蜂は今子を産んでゐる娘たちの母親であります。

春たつた一人で巢を拵らへ、子供を育てた母蜂であります。もう子を育てると云ふ自分の役目がすんだからと言つて、巢の奥の方に引込んで休んだり居眠りしたりして、娘たちが運んで呉れる蜜をたべてばかりゐるようなものですが、決して／＼そんなことをしません。まだ／＼大切な仕事を娘蜂のためにいたします。

この母親の蜂は大きな頭で穴の入口をふさぎます。自分の子供たちが出やうとします時や、入らうとします時には、すこし奥に身を退きます。廊下がすこし廣くて二匹ならべるやうになつてゐますから、そこで擦れちがつて他の蜂は出入りをします。出入りがすむと母蜂はまた出て門番をします。

この作用を外から見ますと、丁度揚蓋のやうなものが入口にあつてそれが上つたり下つたりする様に見えます。それでさつき申しました蟻だの木葉切りだのが近づくとこの母蜂がすぐに追ひ拂ふのであります。

この蜂は用心深くて一時でもその持場を離れるやうなことはありません。自分からのこゝろ外に出かけて花から蜜を取つて喰べるやうな所は見られませんが、娘たちが蜜を運んで来てくれるのかもわかりません。あんまり動かないでちつとしてゐますから、お腹が空かないのかもしれないが、食物をたべるのか、食べないのかもわかりません。それ程忠實に番をして動きません。ただ自分の娘たちが一生懸命に働いてゐるのを見るのが無上の喜びで、よく番をしてゐます。

朝の涼しい頃には外に出てよく太陽に照らされた花粉は見付かりませんが、娘たちは外出しません。けれど母親だけは朝早く起きて入口で張り番をしてゐます。朝の八時から十二時頃までは取入れに一番忙しい時で娘たちは間断なく出入りしてゐますが、眼の廻る程の忙しさで母は戸の開閉をして居ります。午後の暑さの烈しい頃娘たちは外に出て働くのをやめて、家で卵を産みつけるために丸いバンをこねたりしてゐます。その間でも暑さを物ともせず母はやっぱり張り番です。

夕方行つても、もつと遅く燈火をともして行つてもまだ母蜂は忠實に番をしてゐます。晝間の疲れで夜おそくなればきつと眠りませうが、朝早くから夜こんなに遅くまで子供ののために番をする母蜂は何んど忠實ではありませんか。

そのうちに娘たちは家の中の各房に産卵してその房をしめます。そして仕事は終るのです。この仕事が終わると母はほとと自分の役目がすんで一安心して外に娘たちと一緒に飛んで出てしまひます。多分その秋から冬のはじめにかけてこの忠實な母蜂は死んでしまひますでせう。

これは昆蟲の一例であります、人間の母親はそれにもまして、忠實に熱心に子供のために働きます。
私たちはこの母のために何かして酬ひ、母を喜ばせることをしたいと思ひます。

神の愛する子供

(子供の日のため)

「幼児の我に來るを許せ、止むな」マルコ傳一〇の一四。

(一)

両親はその子供を愛し子供に忠實であります。詩人ラマルチンが両親のことを歌つた詩の中に言つてゐます。

「私は柳の木が流れてゐるのを見た。その柳はセエヌ河岸にあつたが、嵐で親幹からもぎ取られて河の上に着いた。枝は朝の光を受けて流れた。渦巻く河の面を流れてゐる間に、一羽の雌鶯が來てその枝の上に憩ひ、巢を拵らへ雛を育てた。雄鶯はその愛の對照たる雛を追ひかけて流れにそつて河を下つて行つた」と。

この詩は兩親がどんなに子供を愛してゐますかをよく説明して居ります。けれど兩親の子供に對する愛よりもはるかに増つて、神の愛は強く、忍耐深いものであります。

あなた方は、大い基督が幼兒を祝福してゐられる繪を御覽になつたと思ひます。大勢の人たちが基督を取り巻いてその恩寵にあふれる言葉を聞かうとしました。すると大勢の人垣の外から、二三人のお母さんたちが子供を抱いて、人々を押し分けイエスさまの前に出て、子供を祝福して貰はうと思ひました。お弟子たちでさへ、基督が折角お話をしていらつしやるのを子供たちで邪魔されるのを喜びにならぬと思つてお母さんたちに外で待つ様に言ひました。イエスさまはそれを御覽になりました。そしてお弟子たちがしたことを喜びになりませんでした。イエスさまは手を舉げて、人々に子供を連れとお母さんたち道に道を譲る様に申されました。

そして言ひました。

「幼兒らの我に來るを許せ」と。

イエスさまの一番美しい性格はその御生涯を通じていつも幼い者に心から愛にみちた態度を取られたことでもあります。イエスさまのお膝のそばに幼兒たちが群り集つて行つたのを見ますと、イエスさまがどんなに幼兒に同情深くいらしたかが伺はれます。

イエスさまは今でも、むかしユダヤに居られた時も同じく「幼兒らの我に來るを許せ」と仰せられます。

聖書の歴史で考へますと、この美しいお言葉は子供の洗禮式とつづいて居ります。

「お母さん」と言つて教會から歸つて來た小さな子供が母親の病床に飛んで行つて申しました。

「私は今日子供の福音を聞きましたよ」と。それは私が今お話をしている話を聞いて歸つて言つたのであります。

ある七歳になつたばかりの子供が病氣になつて臥せてゐました。するとその姉が聖書のここを讀んで聞かせるのをきいてその子供は申しました。

「イエスさまつて、なんて御親切なお方でせう。私はぢきにイエスさまのお側に參ります。そしたらイエスさまは私を抱いて祝福して下さいませう」と。

姉は妹に接吻して申しました。「お前は私を愛して呉れますか、妹よ」

「はい、ですけれどお姉さま、私を怒らないでくださいませ、私はイエスさまをもつと愛して居ります」と妹は答へました。

何故イエスさまは幼児たちにこんなによさしい愛をお示しになつたのでせうか。そのわけをすこしばかり考へて見ることにしませう。

(二)

その一つは幼児は心からイエスさまに信頼するからであります。不信仰の罪は大人だけにあつて、決して子供にはありません。

「信仰とはどんなものですか」と尋ねました時、一人の子供は即座に「それはイエスさまのみ心を行つて、すこしも疑はないことであります」と答へました。これよりもつとよい定義がたれにできませう。

ある冬の日、お母さん一人と、數人の子供たちの家が雪に降りこめられ、仕事は無く、お米を買ふお金が無く、母親は大へん心配してゐました。

「お母さん、大丈夫ですよ、私が天の神様に手紙を書きますから」と小さい男の子が申しました。

母親はいろいろ心配がありますので、子供が言つたことなど氣にかけませんでした。すると子供は帳面を引き破つてそれに

「私の愛する救主さま、私の可哀そうなお母さんと弟と妹たちが、今日朝

飯に何も食べませんでした。お午ご飯もたべませんでした。どうぞお願いです
から何か食物を下さいませ」

「こんな意味の手紙を書いて近所の郵便箱に入れました。その手紙には子供の
家の町名や番地なども忘れず書き込んでありました。」

その手紙を郵便局で事務員が見ますと宛名に「主イエス、キリスト様」と書
いてあるではありませんか。事務員は眼を圓くして驚きましたが、どこに送つ
てよいかわかりませんので、局長の所へ持つて参りました。局長はその時
丁度郵便局へやつて来たある立派な基督信者の手に渡しました。

「私がこの返事をしませう」と、その紳士は答へてすぐに書いてある番地を尋
ね子供の一家を救つてやりました。神様は自分の代りにこの紳士をお送りにな
つたのであります。

(三)

次にイエスマさが子供をお愛しになるのは、子供は神を畏れるからでありま
す。

あるいつも盗みをする親がありました。ある晩自分の子供を連れて隣りの麥
畑に麥を盗みに参りました。持つて来た大きな袋の口を開けそれを子供に持た
せて、「誰か人が来はしないかお前よく氣をつけて見ておいでよ」と言つて、麥
の穂を取りはじめました。

暫くしますと

「お父さん、見てゐるかたがあるのを忘れましたか」と子供が叫びました。父
親は驚いて折角取つた麥の穂をすてて、子供のそばに近よつて、小聲で
「たれが見てるのだい」と尋ねました。

「だつてお父さんは神さまが天から見ているのを忘れるにはならない
でせう」と子供は答へました。父親は子供に教へられて、はじめて自分の悪る

かつたことを悟り、親子は空の袋を持って家へ歸りました。

(四)

子供はいらない時に耻しがるやうなことの無い無邪氣さをもちますから、イエスさまはお愛しになります。

大人は自分一人でお祈りをする時には、お祈りをしたりその他の神さまへのおつこめをします。けれど大勢の人のゐるまへでは耻しがつて、しないものであります。

ある大きな船に乗つた船客は大勢ありました。その中には立派な基督信者もありました。けれど、その甲板の上で一人としてお祈りをする者はありませんでした。するとその中にたつた一人の少年が膝まづいて、他の人にはかまはずお祈りをしました。少年は人前でも自分のうちとちつともかはりませんでした。

大人にはこんな無邪氣さはありません。

(五)

次には子供は謙遜であるからであります。

今一つは子供は愛の精神を持つてゐるからであります。

子供は両親からごんなに叱られても、暫くするとまた両親を愛することにかはりなく、父や母の首にだきつきます。それは子供の愛には偽りが無いからであります。

それと同じ様に子供の天の父に對する愛にはすこしの偽りもありません。それですから神様が子供を何者にもまさりて愛し給ふのはあたりまへであります。

神は子供の祈りに耳を傾け

その讚美を喜び給ふ

人間の智慧は子供に「大人になれ」と教へます。けれど神の智慧は神に愛されんと欲するなら「子供になれ」と教へます。

(John N. Norton, Milk and Honey P. 190)

茨と百合花

(花の日のため)

荆棘の中に百合花のあるが如し(雅歌二の二)

(一)

茨の中に百合の花が咲いてゐるのは、めつたに見られませんでせう。百合には種々の種類がありますが、どれもかまひません。百合の花はみんな美しく、堅い、硬い、刺のある茨とはくらべものになりません。世界中で谷の百合(すざらん)のやうに花が美しく香のよい花は他にありません。謙遜で清い花の鈴をおとなく傾けて、暖い夏の微風にそよよと吹かれます。祈りのやうな歌をその花は奏で、天の使のみがその調をきき得ると思ひます。このやはらかな、美しい、やさしい花があらうしい硬い茨の中に成長してゐると想像

してごらんない。死屍をあさる秃鷹の中に鳩があるやうであります。
 蠟石のやうな純白な、しみのない、よごれのない白い百合の花があります。
 これがどす黒い茨の中にあるとしたなら、ごんなにか目立ちませう。それは残
 酷な、鋭い牙をもつた狼の群の中にある雪のやうに白い羊を想像させませう。
 それはまた信者の少年少女や、大人がこの世界の中に居るのを想像させませう。
 このことをすこし考へて見ることにしませう。

(一一)

百合の花がごんなに美しいかといふことを忘れてはなりません。私はたれも
 これを忘れる者はないと思ひますが、基督信者の少年少女たちが、ごんなにイ
 エスさまのお眼には美しく見れるかといふことを、人々が忘れるはすまいかと心
 配してをります。イエスさまが私たちを御覧になると同じ様な姿を見せてくれ

る鏡はありません。私たちに自分の姿を見せてくれる鏡はイエスさま御自身だ
 けであります。

私たちが鏡を見て、ごんなに自分の姿がその中にうつつてゐるかを見ますや
 うに、私たちがイエスさまを愛し、イエスさまが私たちを愛し、私たちがイエ
 スさまを仰いでゐますなら、いつかはきつと私たちもイエスさまに似て参ります。

イエスさまは美しいかたでありますか。そうです、イエスさまは非常に美し
 いかたであります。イエスさまは幾萬の美しいものの中でも、特に優れた一番
 美しいかたであります。イエスさまの美しさにたぐふべき花は地上に一つもあ
 りません。イエスさまを仰ぐことは喜びであります。

私たちが鏡を覗いた時に、自分の姿は美しくないと思ふかも知れません。ま
 た他の人々も私たちを美しいと見ないかも知れません。併しイエスさまを愛す

る人々をイエスさまが御覧になつた時、その人はイエスさまにとつては大そう美しく見えます。その美しさは天の王御自身のやうにだん／＼と美しくなつて行く美しさであります。

私たちがイエスさまを愛するならば、イエスさまが私たちのことを思つて下さると云ふことを忘れてはなりません。これを思つてゐることは、私たちが幾たびが人々に捨てられた時、私たちに力を與へます。なせなら私たちは、たとへ捨てられたとしても、眞に善い人の眼には、私たちがよく見られると云ふ信仰がありますから。百合の花の美しさはソロモンの榮華の極みだに及ばなかつた様に、イエスさまの御眼には凡て信仰あつた少年少女は、すべてのものよりも美しく見えます。

しかしこの世界では、主の百合花はいつも茨の中に生れてゐます。あなたたちは私が何を言ふかお察しと思ひます。ある所には非常に悪い家庭があります

父親は不信仰で、母親は酒呑みで、兄弟姉妹たちは悪い行ひばかりしてゐますけれどその中のたつた一人の小さい子供だけがイエスさまを愛します。この子供こそ茨の中の百合ではありませんか。

親や兄弟の行ひや言葉を見るにつけ、聞くにつけこの小さい子供の心は痛められます。その周囲の悪事でこの小さい魂は傷つけられることもありませう。丁度強い風が吹いた時、茨のこげで美しい可愛らしい百合の花びらが、傷つけられますやうに。

(三)

今度は神の百合のまはりを取りまいてゐる茨のことについて考へて見ませう。茨は茨を傷つけはしませんが、たやすく百合は傷つけられます。ある人々は自分のそばに罪深いことが行はれても、それを悪いとも思はず、感じもせず、

氣にもどめないものがあります。何故ならその人は自分が茨であつて、その棘にもなやまされないのであります。

けれど百合はそれを感じます。それですから、私たちがイエスさまを愛すれば愛する程、心や行ひを清くし、イエスさまを悦ばせることをすればする程、私たちのまはりに起る罪深いことを悲しみもすれば、苦しみもするやうになります。それで、私たちがかゝることに悲しみを感ずるのを喜びなさい。それは私たちが茨でなくて百合であると云ふ證據でありますから。

あなたが茨であるなら、茨を感じないでせう。けれどあなたが百合であるから、その痛みを感ずるのであります。決して罪となれつ子になつてはなりません。その痛みを感じ、慄へ戦き心を害されることが多ければ多い程、あなたは罪から遠ざかり、百合花のやうに美はしく成長することが出来ます。

私たちは、はじめにはそんなことを考へませんでせう。けれどぎつとそれに

ちがひありません。私たちは茨から多くの知識を學ぶことが出来ます。茨の中に育つてゐる百合を見ますと、茨をさけて、その莖をあらちちらと曲げて、棘のない、廣い、日光のよくあたるところに花を開きます。これから私たちが學ぶことは、私たちが主を愛しない人々の中に住んでゐて、心を傷つけられないやうにするためにはどうしたならよいか、即ちそれをさけることを學びます。

百合が延びて行く所にするごい棘がありました時、百合は眞直に進んで行つて、刺をおしのけて進んだらどうでせう。そんなことはできません。自ら傷つくばかりであります。それですから棘があると思つたら、よけてそのわきを通つて延びて行きます。これが私たちの學ぶ點であります。怒つた言葉に怒つた言葉で返事をしてはなりません。温和なしい言葉は怒を和らげます。怒りに怒りて答へて自ら傷つくよりも、それからさける方がよいことあります。

柔和な百合は、さけて勝利を得ました。なせなら刺をさけたために傷つかな
いで、美しい花を開き、人々に愛せられました。イエスさまは「幸福なるかな
柔和なる者、その人は地を嗣がんと仰せになりました。その通りであります
茨は焼かれるとも、百合は育てられます、百合は冠に造られます。百合は茨
の中に百合としての本分を失はないで成長することを知つてゐます。これが私
共の學ぶ點であります。イエスさまは、たれでも、智恵を求むるなら、自分に求
めよ、それを與へると約束なさいました。それですから、イエスさまは私共が
どうして茨の中に成長するかを尋ねるなら教へ給ひます。イエスさまに尋ねな
ければなりません。

(四)

今一つ考へなければならぬことは、私たちが神を忘れないために、時として

は茨が必要であると云ふことであります。棘が私たちを傷つけやうとしてゐる
と、私たちは注意深くなります。私たちに神を思ひ出させるものがなくなると
私たちは神を忘れる恐れがあります。

けれど時には、茨は私共を傷ふものを遠ざけてくれます。百合が森の中に一
本で育つてゐると、動物からふみにじられる心配があります。けれど茨がその
まはりにある時は、動物の蹄は茨をさけて通ります。これが神様が私共に色々
な面倒な事を起らせ給ふわけであります。

面倒な事件には棘があつて私たちはそれを好みません。けれど神は私共の必
要なものを御存じであり、私たちの上によつてくる危険を御覧になつて、私共
を守るために、棘をお送りになります。籠の中の金絲雀は、囚れてゐて他の鳥
のやうに自由が得られないことを苦しく思つてゐませう。けれど金絲雀の自由
をさへぎる籠は、また同時に籠の外にゐる鳥が遭遇する危険を防いでくれます

籠の中にあるからこそ守られて、冬にも夏にも食物を興へられます。そのやうにイエスさまを愛する人々も時には病床にごちこめられ、棘のやうな苦しみを味ひます。そして何故病氣なんかになつたのかも怪しみます。けれどいつかは、籠の中の鳥のやうに、何か遭遇しなければならぬ危険から守られた籠が病床であつたことがわかるであります。

遂に百合花は庭造りに掘られて、花園に植ゑられ、愛されますが、茨は伐りすてられます。茨の中の百合を掘るには、棘に手をかきむしられて、傷つくこともあり、容易ではありません。イエスさまはこの手の役を引き受け、私たちが天の園に移し植ゑるために傷つき給ひました。イエスさまの愛の手に信頼して、茨の中にあつても、キリストさまのために、百合のやうに成長しやうではありませんか。

(J. Reid Howatt. The children's Dew. P. 141)

勇敢な青年

(クリスマスについて)

數年前のある日、ナイヤガラ瀑布の近くにある人々は「瀧の中に人が落ちてゐる」と云ふ叫聲に驚かされました。驚いて集つて来た人々は、吊橋を渡つて岩の上を集つて来ました。

「あそこの岩の上に人が嚙りついてゐる」と指さす方を見ますと、米國側の瀑の下六十尺位の、低い水に洗はれる岩の上に、一人の人がつかまつてゐました。「助けることが出来やうか、どうかして救ひ上げたいものだが」と人々は口を揃へて言ひました。するとある人が長い繩梯子を持つて来て、それを下しました。けれど岩の下の方の裂目のところに、雑木が生れてゐて、その藪に妨げられて、梯子は人がつかまつてゐる岩までとどきませんでした。そのうへ藪にか

らんで引きあげること出来なくなりました。

「誰か下りて行つて、梯子を真直に下して、あの人を救ふ者はないか」

人々は言ひ會つてお互の顔を見合はせました。けれどそれを實行することは恐ろしいことでありました。これを決行するには自分の生命を捨てる覺悟がなくてはできませんでした。

「私が行かう」

と云ふ力強い聲が、とうとう一人の青年の口から叫ばれました。青年はその繩梯子につかまつて、用心深く一步一步を下りて行きました。下まで下りて、藪をはらつて、梯子は岩にかちりついてゐる人の側まで下されました。

梯子はゆらく動きました。青年がゐる下の方では水が泡を立てて、逆巻いてゐました。一度手をゆるめたら、一度足を踏み外したら、青年は淵の真中に落ちて藻屑となつてしまはなければなりませんでした。けれど青年は、ゆつ

くりと、またしつかりと、一步一步、梯子を下りて行きました。

とうとう青年は、濡れ鼠になつて、水に打たれた人が嚙りついてゐる岩の所まで来ました。青年は左手でかく繩梯子を握り、片足を水が打ち寄せてゐる巖の上にしつかりと踏みしめ、右手を差出して、そのぬれた可愛そうな人をつかまへ、慰めの聲をかけて、繩梯子をつかまへて、よじ登らせました。

苦しんで、骨折つて、時折は休んで力を恢復しては、可愛そうな人はよち登つて行きました。その間、青年は下で梯子をもつてゐて、すこしでも動揺をすくなくしました。

とうとうあはれな人は上に着きました。人々は手を振り、聲をあげて迎へました。その人は安全に人々の腕に抱かれたのであります。

青年はそのさまを見上げて、スル／＼と安全に梯子を登つて行きました。人々の賞める聲はしばらくはやみませんでした。

以上のお話はクリスマスの意味を説明する大へんよい例だと思ひます。この話はほんの千萬分の一も言ひ盡してはゐませんが、イエスさまが私たちのためにして下さつたことを暗示してゐると思ひます。

イエスさまは暴風雨と、危険と、悲しい罪の死の中にゐる私たちを救ふために天から下つて來ました。

イエスさまは天から私たちの所まで下りておいでになりました。彼は岩の上に立つてゐた人々のやうに、私たちに上つて來いと言つて、ちつと天に立つてはゐませんでした。この話にあつた勇敢な人のやうに、自分から天より下りて來ました。

その青年は危険を犯して、濡れて岩に啣りついてゐた人を救ひました。けれどもイエスさまはそれよりも、もつと大きな事をしました。イエスさまは梯子を與へるだけでなく、これによち登る力を與へました。いやそれ以上のことを彼

はしました。

イエスさまにたよる者を、迷へる羊を探し求める牧者のやうに探し求めて、肩にかついで上つて下さいます。

私たちがイエスさまに頼るなら、私たちは一人残らず救はれます。イエスさまはこの仕事をするために、この世界においでになりました。

クリスマスは、イエスさまがこの世界にお出でになつた事實と、有様を知るよい時であります。

(ウエイランド、ホイト博士の説教の大意)

神の武器

—節制日兒童説教—

「神の武器を執れ」エペソ書六の一三。

「聖書エペソ書六の一〇—二〇」

私たちはごく小さい時から誘惑をうけます。時とすると氣付かない誘惑さへあります。小さい子供でもしてはならぬ事と思ひながら、それをしてみたいと云ふ氣が起り、それをやつてしまつた結果、怪我をしたり焼傷をしたりします。このやつて見たいといふ氣もちを起させる力が誘惑でありまして、これは年とればとる程強くなります。

子供の時分には、両親や先生がありまして誘惑を警戒し、その恐ろしい結果

から保護してくれましますけれど大人になりますと、自分獨り手に誘惑と戦はなければなりません。誘惑だと思ふと、すぐに戦ひの準備をすることが必要であります。

使徒パウロはこの戦ひに何も準備も武装もしないで無手で向ふことの愚さを知つて「神の武器を執れ、汝ら惡しきに遭ひて仇に立ちむかひ、凡ての事を成就して立ち得んためなり」と申してゐます。

ホーマーのウリセスの物語に出て來る話であります。シシリイ島近くの小島に、シレンといふ女神たちが住んで居りました。この女神たちは何か悪いことをした罰のためこの島に流されましたので、この島の附近を通つた人たちは女神の歌に吊り込まれて溺れ死なないものが一人でもあると、すぐに女神たちは消え失せさせられると云ふ罰を受けて居りました。

女神たちは自分の生命に拘ることですから、一生懸命に音楽を奏で、多くの

水夫たちはその歌に吊り込まれて舵を過まり、難船しては生命を失ふのでありました。

ウリセスはこの話を聞き、女神たちの力を奪つて人々を救はうと決心しました。この歌の恐ろしい誘惑に勝つためには充分の準備をしなければなりません。それで水夫を数名選んで、自分の計畫をよく授けました。

その計畫といふのは、ウリセス自分の身體をしつかりと船橋に縛りつけて、女神たちが眼に見え出し、その音楽が聞えて來ました時、彼が音楽に誘惑され船を女神の方に向けて漕ぐ命令をしても、決してそれを聴かないで、眞直にその島を離れるやうに、全力をあげて漕ぎといふのでありました。充分この計畫を授けて、今度は水夫たちの耳に蠟をつめて音楽が聞かないやうにして、いよいよこの冒險な航海をはじめることになりました。

彼等が島の近くに參りますと、女神は待ち構へたやうに音楽をかなではじめ

ました。その美しい響きは波の上を漂ふてウリセスの耳に響いて來ました。ウリセスはこんな美しい音楽をこれまで聞いたことはありませんでした。彼の靈は奪はれその音楽の音を慕ひ、恐ろしい誘惑も何も忘れて、女神の居る島に向けて船を漕ぐやうに合圖しました。けれど水夫等は前から教へられて居りますから、その合圖は聴かず、全力をもつて漕ぎはじめました。

船は矢を射るやうに走つて、やがて島は見えなくなり音楽は聞けなくなりました。それで女神シレンの力を破られ、それから後は音楽に心を奪はれて、難破して死ぬる者は無くなつたと云ふことであります。

この美しい物語は私たちに二つのことを教へます。その一つはウリセスは大きな誘惑に遭ふことを前もつて知つて居りましたことで、その二は、最上の用意をしますまでは進んで行かなかつたことであります。彼がこれを決行しやうと考へたのは、仲間の人を救ひ、人のためになるためでありました。これは私

共に誘惑には不注意であつてはならぬことを教へます。誘惑に勝つためには、注意深い準備と眞面目が在ることを示します。

使徒パウロはこれと同じことを教へて「神の武器を執れ」と申しました。パウロは軍人と武器についてよく知つて居りました。彼はこの言葉を書いて次に胃、胸當、盾、劔等の武装をせよと教へました。彼は武装しないものが受ける恐ろしさをよく知つて居りました。

次にパウロは人生の戦ひと、遭遇する恐ろしい危険を知つて居りました。そして基督者の軍人が武装しないと、どんな眼にあふかを知つて居りました。エペソ書六章はこの誘惑にどうして勝つかをよく教へて居ります。

パウロの教へによりますれば、武装します武器は、正義は胸當、信仰は盾、救は胃、神の言葉は劔であります。充分準備しやうと思ふものはこの道具で武装しなければなりません。

誘惑はいろんな場所、いろんな方法、全く豫期しない時にさへ來ますから、脱れることはできません。學校でも家庭でも來ます。誘惑とさへ思はれない程單純な形で來ることさへあります。盗みをするとか、嘘言をつくとかいふ大きな事の中に限りません。教師や両親を欺いたり、他人の成功を妬んだり、我儘や不從順が誘惑であることがあります。これは誰れでも打ち勝てる誘惑でありまして、こんな小さな誘惑に勝てぬやうでは、大人になつてから來るもつと強い誘惑にどうして勝てませう。

次に私たちは準備なしには誘惑に勝つことはできません。心にしつかりとキリストの精神を宿すことが大切であります。キリストのみ靈を宿すために心を開かず、キリストの模範に従ひ、その教訓を受けぬなら、自分の弱い力だけでは敗けるに違ひありません。

どんな誘惑にも勝つための充分な恩寵があります。毎日キリストから力を與

へられるやう祈る者にとつては恐ろしい誘惑はありません。その上誘惑が私共を害はないで、かへつてより高い人格の人にします。丁度運動をすればする程身體が強くなりますやうに、誘惑に勝てば勝つ程強い精神を持つことができます。

(John Farnes の The Shattered Temple の大意)

日曜學校教話資料終り

大正十四年十月五日印刷
大正十四年十月廿五日發行

【定價金壹圓】

日曜學校教話資料

著者	北村勳
發行者	西阪保治
印刷者	關谷紋次
印刷所	大阪活版印刷所

發行所

大阪市浪速區
今宮中學校門前

日曜世界社

電話大阪一六七四番
電話式九九五番

285
27

終

